

パレット



旧魁陽亭の正面（平成30年6月撮影）

旧魁陽亭と小樽

老舗料亭の歴史の発掘と活用に向けて

高野宏康 小樽商科大学グローバル戦略推進センター 学術研究員

▼あらためて注目される旧魁陽亭

北海道を代表する老舗料亭といわれた旧魁陽亭は、平成二七（二〇一五）年に閉店後、閉鎖されていたため、建物がどうなるか、心配する人が多かった。「外国人が購入し、解体されることになった」といった噂がインターネット上でささやかれたこともある。

実際は、同二九年に一般社団法人・空家空室対策推進協会の紹介により、総合不動産業のインフィニットルミナス（東京）が買収し、翌三〇年十月、不動産投資業オール・ケア・アシスト（札幌）に所有権が譲渡され、建物は保存・活用されることとなった。

同年五月には、小樽市が認定された日本遺産「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間〜北前船寄港地・船主集落〜」の構成文化財の一つに指定されたことで、あらためて旧魁陽亭が注目されるよ

うになっている。

旧魁陽亭の建物は、明治二九（一八九六）年の建築といわれ、小樽市指定歴史的建造物に指定されている。また、伊藤博文が使用した白絹子の布団、石原裕次郎の着物など、訪れた国内外の著名人のゆかりの品々、創業以来の歴史資料など、邸内に遺っている膨大な資料も大変重要であるが、これまでまとまった調査は実施されたことがなく、その実態はよくわかっていなかった。

平成三〇年九月、「旧魁陽亭の歴史を生かして活用したい」というオーナーの意向を受けて、小樽商科大学と共同研究を実施することになった。共同研究の目的は、資料調査に基づき旧魁陽亭の歴史的意義を明らかにして、データベースを構築し、活用の際しての基本情報とすることである。

同年度の調査により、著名人ゆかりの品、経営文書、書簡、写真、建築図面、陶磁器類など、二千点以上の資料が確認され、創業以来の旧魁陽

亭の歴史の全貌が少しずつ明らかになってきた。

▼旧魁陽亭の歴史的意義とは

旧魁陽亭は、「魁陽亭」「開陽亭」「海陽亭」と三度名前を変えつつ、百五十年以上にわたって多数の著名人たちが訪れ、日露戦後の「樺太国境劃定会議」後の祝宴、石原裕次郎の「愛の逃避行」など、エピソードは無数に知られているが、旧魁陽亭が小樽の歴史にとってどのような意義をもっていたのか、必ずしも明確ではなかった。

旧魁陽亭は高級料亭であり、広く一般向けに邸内が自由見学できるようにしたのは平成十三(二〇〇一)年からである。そのため、自分たちには縁遠く、敷居の高い料亭であると思っっている市民も少なくない。今後の活用にあたってはあらためて旧魁陽亭の歴史的意義を検証する必要があると思われる。

旧魁陽亭のルーツは、安政初期に遡るといわれる。初代越中屋旅館の主人の乾児(子分)で、元官船・通済丸の賄い方をしていた松井某という人物が「魁陽亭」の名前で創業したと伝わるが詳細は定かではない。現在地に建物ができしたのは明治初期と推定されている。

当時、海を望むこの山ノ上の丘には弁天社があった。明治元(一八六八)年八月、弁天社に住吉大神が仮奉納され、同四年に量徳町に移転を経て、同十四年に現在の住吉神社となった。海の神を祀る弁天社の跡地に魁陽亭が建てられたことは、魁陽亭の原点が小樽に寄港した北前船主や船乗りたちに親しまれた料亭であった歴史を象徴している。「北前船」日本遺産の構成文化財に指定されたことはとても意義深い。

「魁陽亭」時代の資料は絵図や記事以外ほぼ存在しないが、今回の調査で邸内に創業時から使用していたと伝わる九谷焼が確認できた。九谷焼は

江戸時代初期に石川県山中町（現・加賀市）で誕生し、江戸中期から明治期にかけて北前船によって各地に流通した歴史を持つ。九谷焼は北前船による小樽と加賀のつながりを示す痕跡なのである。

調査の結果、この九谷焼は明治期のもので、江戸後期の文化年間に活躍した陶工、青木木米の写しであることが分かった（石川県九谷焼美術館・中越康介学芸員のご教示による）。この九谷焼は魁陽亭のルーツを示すほぼ唯一の物的資料として歴史的価値があるといえる。

「魁陽亭」は明治二九年四月二七日の住ノ江大火で類焼した後、函館から小樽へ渡って来た宮松家が譲り受け、「開陽亭」と名称を変え、以降、宮松家の三代の女将が経営を担った。今回の調査で、宮松家の前に住吉金八という人物が経営していたが、行き詰まり、魁陽亭を惜しむ藤山要吉ら海運業者の仲介で宮松家が経営者となったことが

判明した。

昭和初期、世界情勢の影響で市内に軍人がたくさん訪れるようになると、開陽亭は海軍の親睦団体、水交社として利用されるようになった。昭和七（一九三二）年頃、王子製紙社長として樺太の往復の合間に頻繁に小樽を訪れていた藤原銀次郎の発案で「海陽亭」に改名すると、小樽の人たちだけでなく、海軍軍人たちの共感も呼んだという。

以上のように、創業以来の歴史をたどってみると、「海」と深い関わりを持つ小樽のまちを象徴する料亭であることが旧魁陽亭の本質であると考えられる。本年度の共同研究では、個々の資料の分析を進め、データベースの構築、情報発信を行っていく予定である。今後の活用に向けて、地道な調査に取り組んでいきたい。